



我等今ここに 生きる

第5代校長
杉本 博

柏原東高校創立20周年おめでとうございます。今20年を一つの節目として、柏原東高校が地域からの信頼を着実に受けつつ、その評価が高まって来ましたが、本当に嬉しく心からお祝い申し上げます。また、これまで柏原東高校を育ててこられた、教職員・保護者の皆様をはじめ、卒業生・在校生そして関係各位方面の皆様方のご努力・ご協力・ご支援に対しまして、厚く敬意を表したいと思います。

顧みますと、私の本校への赴任は、平成3年4月1日でした。よく手入れされた植栽・中庭の一隅に咲いた桜の花など、今も鮮やかな印象として残っています。四季折々の美しい自然に囲まれた本校での勤務は3年間でしたが、学校発展のため改善を必要と考えられる懸案は数多くありましたが、過去の歩みの中で着実に解決されてきたものと確信しております。

生徒数減少の中で、学校の在り方が真に問われようとしている今日、柏原東高校は教職員の素晴らしい時代感覚によって、その揺るぎない位置付けを確固たるものとして発展してきました。教育の画一性・硬直性を打破し、生徒一人一人の個性化・教育の多元化を促すよう、科目選択幅の拡大、コース別学習等が取り入れられてきました。これらは、教職員の日頃のたゆまぬ努力と保護者のご理解の上にたつての成果の現れであると思います。

平成6年3月31日、柏原東高校を最後に退職した私ですが、日々脳裏に去来するものは、あの緑なす学校周辺の素晴らしい環境に、生徒諸君の生氣ある喚声が湧き起こっている姿であります。

また、正門横に校歌の一節「我等今ここに生きる。我等が高校柏原東」と刻んだ石碑があります。卒業生・在校生の皆さんは、この碑を見ながら日々己を省みたことでしょう。

江戸中期の漢学者「頼山陽」の詩に、「十有三春秋、逝ク者ハ己ニ水ノ如ク、天地始終無ク、人生生死有リ、安ゾ古人ニ類シ、千載青史ニ列スルヲ得ン。」大意は、「過ぎ去ってゆく年月は、川の水の如く一度去って二度と戻ることはない。この天地は、始めも終わりも無く永遠だが、人間は生まれることと死ぬことがある。せめて古の偉人の如く千年の歴史に残ることを、この世に置いてゆきたい。」と述べています。卒業生・在校生の皆さんもまた、この碑に語るものを残して欲しいと思います。

最後に、柏原東高校がこの20年の節目を機に、さらに一層充実発展されますことを心から念願いたしております。



創立の頃

初代教頭
細木 孝雄

昭和52年(1977年)に第109高校として発足した柏原東高校が、年々充実発展を遂げ、多数の有為な卒業生を送り出し、創立20周年を迎えられたことに対し、その創設に参加させていただいた一人として本当に嬉しく思うとともに、心からお祝いを申し上げたいと思います。

昭和51年(1976年)の10月1日に教頭の兼務辞令が出ましたが、まだ学校は完成しておらず、八尾東高校の一室をお借りして開校準備場所としました。故巽三郎校長先生の構想を中心に、色々ご指示を仰ぎながら、後日、他の兼務辞令の出た先生方と共に、教育方針、校章、制服、校務分掌、校時表、各種規定等と必死で開校準備を進めました。2月26日に、現在の校舎の東側3分の1の完成した部分に移り、3月1日からの入学願書の受付事務を行いました。

4月8日の入学式は、まだ体育館が出来ていませんでしたので、運動場で行いました。

創立の頃、国分駅付近は古い商店街で、その中を抜けて国道に出て、車に注意しながら国豊橋を渡り、大和川の堤防沿いの道を校門の下まで歩き、それからあの有名な地獄坂(?)を息を切らせて学校にたどり着いたものでした。JRの駅が近くに来るとは聞いていましたが、高井田駅が出来たのは10年近く経ってからのことでした。現在は、国分駅付近の大改造、修徳学院下のJA線路北側の道路の開通、西側の谷が埋め立てられ立派な住宅地への変革、校地にもたくさんの樹木が育ち、20年前とはすっかり変わり落ち着いた立派な環境となりました。以前から、昔、頼山陽が、河内の嵐山と云ったとかで、学校付近は、教育環境としては風光明媚抜群の地ではありませんでしたが、学校へ到着するまでが大変でした。

最後に、これまで柏原東高校を育ててこられた先生方や生徒諸君、PTA、同窓会や関係各位の皆様方のご努力、ご支援、ご協力に対しまして深く敬意を表しますと共に、柏原東高校の今後益々の御発展をお祈りいたします。



創立20周年に想う

第2代教頭

末川 衛

このたび柏原東高校が20周年を迎えられるとお聞きし、「もう、そんなに…」と改めて感慨を深くします。

創立は今更言うまでもなく昭和52年ですが、当時急増の一途を辿っていた高校進学者に対処するため柏原市に初めての府立高校として設置が決まったのがその前年、開校に向けて協力してくれとお誘いを受けて参画し、以来まる9年間、いろいろな面で非力ながらも力を尽くさせて頂きました。

もちろん、すべてが順調に運んだ訳ではありません。開校初年度は現在の3分の1しかない校舎だけの施設で、グラウンドに机、椅子を並べて行った初めての入学式（開校式）、いつも屋上を利用した全校集会（とはいっても1学年だけでしたが）など、何をするにしても青天井の下でした。いちばん辛かったのは通学路の未整備でした。近鉄国分駅前が今のように開発される前のことで、狭い人家の間をくねくね抜けて国豊橋に至り、そこから大和川沿いの車道一本で学校下まで来て、最後は生徒自らが「地獄坂」と呼んだ急坂、先生方も毎日交代で通学指導に立ったものです。

しかし辛い思い出ばかりではありません。年一年、施設や生徒が充実していく喜びは開校当初に携わった者だけが知る感激だと思えます。初めての出願者たちが、蟻の行列のように芝山を越えてやって来てくれた時の感動はいまもって鮮明です。何よりも在任9年の間に、学校づくりそして学校運営のノウハウを基本から体験させて頂いたことは、その後枚方津田高校の設立、開校に大きく役立ったと感謝しています。

柏原東高校は既に20本の年輪を刻みまいた。20周年を契機にさらに一段とその幹を太らせ、未来に向かってたくましく成長していかれることを願って止みません。



創立20周年に 寄せて

第1期学年主任

田上 喬一

創立20周年を迎えられたことに対し心から祝意を表し、さらなる発展を祈念いたします。

風光明媚なこの地にはじめて訪れたのは、開設前の秋であった。

静かだった。時々、関西線（当時）の鉄橋を走る電車の音がきこえる以外はカラスの鳴く声くらいで、環境には恵まれているとの印象をもって、さまざまな思いを胸に膨らませながら帰途についた。

初代校長の巽先生はすでに故人となられたが、何時も笑顔で穏やかに応接され、懇切にご指導いただいた。教頭の細木先生は何かとこまやかな配慮のもとご自分のお考えを曲げることなくその理念を現実のものとするべく努力された。ご苦労が偲ばれる。

いよいよ教育活動が開始され、慌ただしい日々が過ぎ去っていった。就中、もっとも困難と思われたのは経験をもつ教員間の指導上の理念の相違を調整することではなかったか。しかし年を経るごとに非常に優秀な若手教員が多数着任され、その度に新たなエネルギーが貯えられて生徒への指導力を増幅していった。このことは高く評価されなければならないと思っている。

広く教育という作用は、教える者と教えられる者との間に信頼がなければ成立しない。この信頼が危ない状態と感じられたこともあった。1期生のなかにも教員の手をずいぶんわずらわした者がいた。しかし、その生徒を見ながらそこに常に自分の姿を見る思いであった。人は誰でも、誰かの手をわずらわさなければひとり立ちはできない。動物のなかでも最も手のかかる存在である。そのことを理解しながらも、現実には厳しくかつ重いものがあつたこともまた事実である。

大方の生徒達はとても明るくかつ親切で、親しみももてた。放課後などは自発的に何人かで質問にやって来てそれが終ると歩きながら帰途についた。そこでは教室とはちがって和やかな雰囲気での会話から生徒達の生活や、クラスの情報などの一端を知るよい機会であつたと同時に教えられることもまた多かつた。疲労を忘れるひとときであつた。

幾多の卒業生が、人間として立派に活躍しておられることを見聞きするにつけ、曲りなりにも情熱を傾ける「時」と「場」を与えてくれたことに深い感謝の念を抱かずにはいられない。

創立20周年を期に、過去から大切に育んできたものはなにか、ながく受け継ぎ発展させるべきものは何かと問うなかで、新たな展望が拓けることであろう。20年の伝統は必ず新たな変化にも対応し、消化していく力をもっているはずである。さらなる発展を期待して止まない。

最後に、巽先生のご功績に深く敬意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。



20周年に寄せて

第5期学年主任

吉田 勝一

私は昭和53年の4月から、2期生の入学と共に柏原東高等学校に勤務することになり、昭和63年3月まで9年間勤めさせて頂きました。その間、2期生、5期生、8期生の担任団の一員として3回卒業生を世に送り出しました。早いものでもう創立20周年、まことにお目出度うございます。

離れて10年、ふだんは現任校の勤務に追われて柏東のことを忘れておりましたが、この度20周年記念誌の原稿依頼があり当時のことを思い出しながら筆を取っています。

当時は生徒の急増期であり、その生徒を収用するためには多くの学校を作る必要があった。そのためには府としては多額の建築費が必要であり、建築費を安く上げるために考えだされたのが一棟式の校舎で、当時新設される学校はすべてこの方式で建築されていた。この校舎は風通しが悪く、また廊下は薄暗く、夏は大変暑くて不評であった。

私が着任した時は、まだ学校のあちこちで建築工事が行なわれており、体育館は無く、生徒を集めての集会は、運動場で行なうのであるが、雨でグラウンドの状態が悪いときなどは、この一棟式の校舎は屋上が広いので、一つの学年ぐらいの少人数で集会を開くには都合がよかった。度々、よく利用したものであった。屋上に上ると、晴れた日は見晴らしがよく、国分の町はもちろんのこと、遠くは富田林のPLの塔も良く見えた。

私は柏東に来るまでに他校で14年の教職経験を持っていたが、この学校で初めて経験することが多かった。その一つに、新入生に対して行われる入学間なしの行事として宿泊訓練があった。私はこれに2回程参加した。これは生徒を早く高校生活に慣れさせるという目的で行なわれていたが、生徒ばかりでなく、先生も早く生徒に慣れるという目的があったのではないかと今になって思う。当時大学を卒業したばかりの先生が多く、教職員の平均年齢は非常に若かったように記憶している。新しく誕生したこの若い学校を一人前に育てるために、教職員が一丸となって、非常に活気にみなぎった学校であった。



更なる発展を

初代PTA会長

石川 修一

柏原市唯一の府立高等学校として、柏原市を始め各方面から期待され、昭和52年に創立されて早くも20年を迎える、めでたい節目の年を心よりお祝い申し上げます。

想えば、創立当初PTA会長としてご命を頂き、基礎造りをしっかりとっておかなければと思ひ、毎日の様に学校に足を運んだ事が思い出されます。開校当時に植えた樹木も年限と共に成木となり、又数多くの卒業生も立派な社会人として、各方面で活躍しておられる事でありましょう。

1期生として入学した私の娘も、二児の親として頑張っています。

創立以来、其の間多くの教職員の方々の並々ならないご苦勞があればこそ、多くの生徒が集う基礎となっていくことに、心より御礼申し上げます。私も何かお役に立たなければと思いつつも、日頃にご無礼ばかりしている次第ですが、唯一、創立以来、野球部の後援会を設立して、今日に至るまでつとめさせて頂いておりますが、何よりの私と柏原東高校の接点であります。

何はともあれ、多様化する現況に対して、生徒諸君も、本来夢を持ち、互いに励まし合いつつ、学業に、体育向上に、精神的に、成人されていく日々でなければならないと思います。

共々に親として、いかにあるべきかを、更に見つめなおして、PTAとしての活動の目的達成の上に努力されることが、創立20周年記念の意義かと思われ、更なる柏原東高校の発展されることを熱望いたします。



母校が飛躍する

同窓会会長

郡山 順夫

柏原東高校、創立20周年おめでとうございます。1期生として卒業した私は、同窓会を通じて、この20年、柏原東高校と携わることで、今回人一倍、喜びを感じている次第です。

さて20年前を振り返ると、私の入学式は、グラウンドで行われ、その当時まだ体育館が完成してませんでした。校舎も今の3分の1で、ただ広くて殺風景な山の中の学校でした。その後、体育館、食堂、プールと徐々に学校らしくなり、卒業の頃にテニスコート、バスケットコートが出来、最初の頃とは、えらく変わったものでした。そして近鉄国分駅前も入学当時は、ライフもロータリーもなく今とは違った風景でした。その後、JRの高井田駅や通学路等も整備され日々、変わってきました。中でも、私たちの頃の制服から今の制服は考えきれないぐらいの変化です。色。型スタイルと20年の時代の流れと私が年をとったんだなあと考えさせられます。しかし、いつまでも変わらないものもあります。その一つに体育祭で行われている男子の体操「エッサッサー」でしょう。こうしたものが一つの伝統ともいえるものになり、それが一つふえ二つふえて柏原東高校という形を作って、この20年になったのでしょうか。これからの10年20年もこうした一つ一つの積み重ねで、母校である柏原東高校が私たちの楽しみの一つであって欲しいと思います。

ところで、先生方もお変わりになり、入学当初からの昔を知る人も少なくなられ、卒業生としては寂しさも感じますが、それは仕方ないことで、新しい、私と同じ時代の先生方も多くなり、先生方も時代とともに変わっていかれていることと思いますが、その中で、代々の先生達からの引き継がれた教師魂みたいなもの、あることと思います。そこに生徒も先生も、学校をとりまく環境も、変化進んでいくの中で柏原東高校が地域や社会の中で今以上にアピールできるもの、それが形や精神だけにこだわらず、全てのものに共通するものが一つでもあれば、この柏原東高校が今から飛躍して行くのではないのでしょうか。それを、これからの10年、20年に期待してやみません。

新設校から20年たち卒業生の皆様も社会にてたくさん活躍されています。日々の生活と社会の中でこうした喜びを感じることが、出来たことを大切にしたいと思えます。

在校生、卒業生、教職員、PTA、学校関係の皆様、頑張ってください。柏原東高等学校、創立20周年おめでとうございます。



創立20周年によせて

校医

細見 義一

大阪府立柏原東高等学校創立20周年記念 誠にお目出度うございます。早いものですね。大阪府歯科医師会柏原市支部に、学校歯科医の依頼があったのは、私が前西尾支部長の下で、副支部長をしていた時でありました。あれからはや20年たったのです。人間で言えば、成人式にあたります。

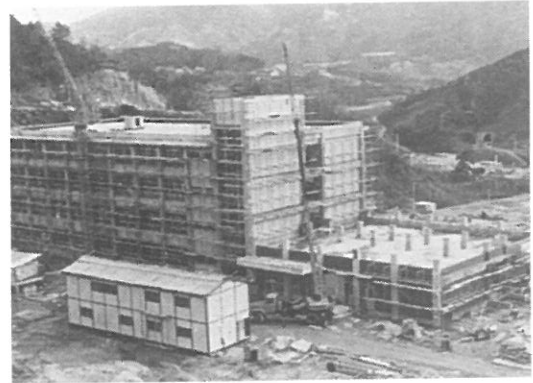
どことなく学校の校舎も年輪を感じさせます。校庭の木々も立派に大きくなって樹陰を作っています。巣立っていった生徒さんたちも、さぞ皆それぞれに立派に成人し、社会に貢献されている事と、よろこばしく思っております。

現在の学校のある場所は、私の子供の頃は、中河内郡塀下村字高井田と云ったと思います。あまり人の行かないさびれた雑木林の広がった丘陵地であった様に記憶しております。あんな所に府立高校が出来ると云う話を聞いた時は、まさかと思いました。近代土木追築工学の進歩は本当に素晴らしいものですね。三段とは云え、こんなに広い平地がとれるとは夢にも思いませんでした。何もなかった所ですから、教育環境には申し分のない所です。先生方の熱心な御薫陶のおかげで、生徒さん達もすくすくと成長されている事と信じています。又府立高校の出来たおかげで、近隣は立派な住宅地に成長しつつある様に見受けられます。その証の様にJRも高井田駅を作りました。生徒さん達の通学も大変便利になった事と思います。

又武田塾などは急に一等地に成長しました。山手には新興住宅地や、市文化センター、文化遺跡公園、サンヒルetc.が目白押しに出現して来ました。「10年ひと昔」と申します。20年たったのです。すでに立派な校風も出来上がっている事と存じます。全校をあげてこの校風をもり立て、府立有数の学校になられる事をお祈りして、御祝の言葉としたいと思います。

沿革

- 昭和51年 4月15日 府議会において大阪府立第109高等学校(仮称)設立のため建設予算議決
大阪府教育委員会事務局高等学校等設立準備室において開校準備事務の開始
- 5月11日 第1期工事請負契約の締結
- 6月 9日 第1期工事着工(創立記念日)
- 12月17日 大阪府立柏原東高等学校として設置条例の議決
- 昭和52年 1月 1日 設置条例の施行に基づき巽 三郎(初代)校長就任
- 1月 7日 柏原東高等学校開校準備室を大阪府立八尾東高等学校に設置
- 2月25日
- 2月26日 現在地へ移転
- 2月28日 第1期工事竣工
- 4月 1日 大阪府立柏原東高等学校 全日制普通課程 開校
教職員 35名
1期生 552名(12学級)入学
- 4月 8日 第1回入学式挙行
大阪府立柏原東高等学校P T A設立
- 昭和53年 2月28日 第2期工事竣工
- 4月 1日 2期生 564名(12学級)入学
- 6月30日 プール工事竣工
- 10月31日 体育館工事竣工
- 11月11日 体育館落成記念式典挙行
校歌制定及び発表会
- 昭和54年 2月28日 第3期工事竣工
- 3月15日 校舎北側斜面防護工事竣工
- 4月 1日 3期生 517名(11学級)入学
- 昭和55年 2月25日 第1回卒業式挙行
- 4月 1日 4期生 517名(11学級)入学
- 5月31日 第4期工事竣工
- 9月12日 通学路(柏原市道)完成
- 9月22日 通学路開通式挙行
- 昭和56年 2月24日 第2回卒業式挙行
- 4月 1日 5期生 517名(11学級)入学
- 11月 7日 五周年記念式典挙行
- 昭和57年 2月24日 第3回卒業式挙行
- 4月 1日 石香 亨(2代)校長就任
6期生 423名(9学級)入学
- 昭和58年 2月24日 第4回卒業式挙行
- 4月 1日 7期生 564名(12学級)入学



- 昭和59年 2月24日 第5回卒業式举行
4月1日 8期生 564名(12学級)入学
- 昭和60年 2月24日 第6回卒業式举行
4月1日 玉井 庄平(3代)校長就任
9期生 564名(12学級)入学
- 昭和61年 2月25日 第7回卒業式举行
4月1日 第10期生 575名(12学級)入学
11月8日 10周年記念式典举行
- 昭和62年 2月24日 第8回卒業式举行
4月1日 11期生 576名(12学級)入学
- 昭和63年 2月24日 第9回卒業式举行
4月1日 田代 徹也(4代)校長就任
12期生 576名(12学級)入学
- 平成元年 2月25日 第10回卒業式举行
4月1日 13期生 528名(11学級)入学
- 平成 2年 2月25日 第11回卒業式举行
4月1日 14期生 460名(10学級)入学
10月1日 情報処理教室(LAN教室)竣工
- 平成 3年 2月25日 第12回卒業式举行
4月1日 杉本 博(5代)校長就任
15期生 360名(8学級)入学
男子制服改定
- 平成 4年 2月25日 第13回卒業式举行
4月1日 16期生 344名(8学級)入学
- 平成 5年 2月25日 第14回卒業式举行
4月1日 17期生 320名(8学級)入学
- 平成 6年 2月25日 第15回卒業式举行
4月1日 朝田 省三(6代)校長就任
18期生 280名(7学級)入学
- 平成 7年 2月25日 第16回卒業式举行
4月1日 19期生 280名(7学級)入学
情報処理(商業)コース開校
女子制服改定
- 平成 8年 2月23日 第17回卒業式举行
4月1日 20期生 280名(7学級)入学
ワープロ教室竣工
11月16日 20周年記念式典举行



1～9期生の思い出



宿泊学習



吹奏楽部
定期演奏会

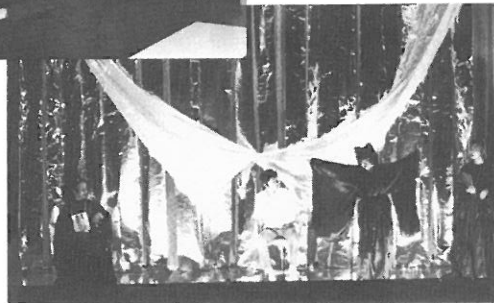


駅伝大会

文化祭



展示



演劇



空き缶製作「モナ・リザ」



熱気球



体育祭



綱引き



応援合戦



仮装先生



ファイヤーストーム

修学旅行



信州への修学旅行



スキー修学旅行

10期

1986~1989



Memories



寿(ことほぎ)、柏原東

10期学年主任
吉田 和男

先日あるテレビ番組に釘付けになった。アメリカのソプラノ歌手バーバラ・ヘンドリックスが案内する「私のお気に入りオペラ」というのがそれ。同じキャストと指揮者で同じプロダクションを3ヶ月、オペラ界ではごく稀な特例をドニゼッティの「ドン・パスクワレ」で行われた。その貴重な体験や感想、リハーサル風景を約1時間にまとめたドキュメンタリーである。リハーサルの重要性を述べた後、彼女が熱っぽく語る。「フランスの画家スーラの作品と同じで、近くで見ると作品を形成している点が見えてくる。作品に取り組む場合、まずは点から入って行ってそれに肉付けしていくのだ。そのためには時間と志を同じくする仲間が必要。新しいことをやったり、即興性を大事にする仲間が必要なのだ。」

同感。我が意を得たり。展開される場面は異なっても、真実は不思議と普遍性をもつものだとつくづく思う。連想は教職生活25年に及ぶ…。

柏原東には12年間在籍した。特に3、7、10、13の各期とは深く関わった。教科指導、クラス経営は個人プレーでもなんとかクリア可能だが、学年・学校の教育活動となるとどうしても組織力、チームワークの良さが不可

欠となる。その点、私は本当に幸福者だ。生徒諸君も含めて人には恵まれた。10期の場合も良き同僚に支えられ、連帯感の強い学年団として誠に充実し、様々な取り組みにチャレンジできた。「花の10期生」と大きな期待と注目を浴びスタートを切ったことが鮮やかによみがえる。

追想は限りないが敢えて1年次の取り組みからひとつ。3学期のL・H・Rで試みた「連風上げ」。HR委員の一担任からの提案で計画、立案、実行。12クラスそれぞれ趣向を凝らした連風が冬空に舞う。何にでも果敢に挑戦したひとつの成果が見事に結実したものだだった。



柏原東で学んだこと



10期生
喜多村 妙

私は、10年前の春、柏原東高校に入学し、その年の10周年記念の講演会に生徒として出席しました。そして、今年20周年を迎えた母校に今度は教師としていることを嬉しく思い、また、月日の流れの速さを改めて感じています。

私たち10期生は、入学当初から、「花の10期生」と呼ばれ、節目の年の新入生ということで、先生方の期待も大きかったようです。その期待に答えて卒業したかどうかはわかりませんが、私たち生徒は、毎日の学校生活を充分楽しむことができたと思います。特に、さまざまな競技や仮装、先生も行われた体育祭、クラスごとに趣向を凝らした文化祭、長野県の妙高原への修学旅行、その他柏原東初の試みであった連風揚げ大会などの行事には、それぞれに楽しい思い出があります。行事ごとに遅くまで学校に残り、いろいろな物を作ったりすることによって、クラスの仲間とも強く団結することができました。

こういった毎日の学校生活の中で、私はコツコツと努力することの大切さや、1つのことを成し遂げる喜びを感じることができました。また、それによって、自分に自信をもてるようになりました。そして、こういったことが今の私の基礎になっており、私は柏原東で本当に大切なことを学んだのだと今更のように感じています。

最後になりましたが、20周年を迎えた柏原東が更に飛躍し、いつまでも生徒がいきいきと学べる学校であることを心から祈っています。



11期 1987~1990



Memories



ひとりひとりの 成長を願って

11期学年主任
仲谷 秀雄

大阪府立柏原東高等学校第11期生卒業式が終わりに近づき、卒業生がそれぞれの思いを胸に退場して行く。涙する卒業生、下向きかげんに一生懸命に表情をださまいとする卒業生…そうした一人ひとりに父母や在校生などの代表からカーネーションが手渡され、11期生は本校を巣立って行った。感無量であった。卒業生代表への来賓からの花束贈呈ではなく、在校生や父母などから一人ひとり祝福されるように成長したことに、卒業生の心意気と教職員の思いがびっしりつまっていた。

1年生の始まりから大小さまざまな問題が続いていたが、生徒のことを中心にすえて学年団が父母とともに考え、とりくむことをいろいろと模索して行った。そのためにお母さん達は労を惜まずこまかな配慮をされたし、学年団は前向きにうけとめた。実現しなかったことも多々あったが、ひとりひとりの生徒の成長を願う気持ちをふくらませ、生徒の見方、育て方を話し合う機運ができてきた。

その後の柏原東高等学校の教育の大きな流れに即してみれば、「漢字博士」のとりくみも特徴的であった。生徒達は楽しく意欲的によく勉強したと思う。しかし、卒

業時まで教育相談活動を組織的に展開するにいたらなかった、というより教職員がそのような視点をもつ余裕がなかったことはかえすがえす残念であった。

